都道府県別賞一等

感謝から知った「備え」の力、広がる「助け合い」の輪

千葉県　柏市立酒井根中学校　二学年

齋藤　來也

ゆっくりと目を開けたとき、僕には何が起きたのか全く分からなかった。視界に広がったのは、見慣れない病院の白い天井だった。家で突然意識を失って倒れ、救急車で病院へ搬送された後、実に二日間も目を覚まさなかったのだという。僕が目を覚ましたことに気づいた看護師さんが急いで連絡を取り、かけつけてくれた母の姿を見たとき、僕はことの重大さを悟った。それまで当たり前に続いていくと思っていた僕の日常は、ある日突然とぎれてしまうかもしれないという怖さを強く感じた。

数日間の入院生活の中で、僕は自分の無力さと同時に、どれほど多くの人々に支えられて生きているかという事実を強く感じた。昼夜を問わず手厚い看護をしてくださる看護師さんや医師の方々、そして毎日のように会いに来て、はげましの言葉をかけ続けてくれた家族。病室のベッドの上で過ごす時間は、これまで自分がどれほど恵まれた環境で、温かい手に守られて暮らしてきたかを深く知る機会となった。退院の日が近づいた頃、僕はふと考えた。今回の入院や精密検査にかかる費用についてだ。中学生の僕でも、治療には大きなコストがかかることくらいは知っている。申し訳なさと不安が入り混じった気持ちで母にたずねると、母は安心させるようにほほ笑み、「保険に入っているから大丈夫だよ。お金の心配はしないで、体を治すことだけを考えなさい。」と言ってくれた。その一言で、胸の奥にあった重い不安感がすーっと軽くなっていくのを感じた。

この経験を通して、僕は生命保険や医療保険という存在の本質を理解した。それは単なる金銭的な保障制度ではなく、僕のように予期せぬ困難におそわれた家族の心を守る〝安心の盾〟なのだということだ。もし保険の備えがなかったら、母は僕の体の心配だけでなく、突然の経済的負担にも苦しめられていたかもしれない。家族の笑顔と普段の暮らしを守ってくれたのは、目には見えないけれど確実に存在していた「備え」だった。その後、無事に学校へ復帰し、当たり前の日常を取り戻した僕は、学校で「助け合い」の仕組みについて学んだ。大勢の人々があらかじめお金を出し合い、誰かが病気や傷害で倒れたときに社会全体で支え合う。その仕組みを知った瞬間、あのとき自分を救ってくれたものの正体が分かった気がした。僕が救急車で運ばれ、命を救われ、こうして再び元通りの日常を取り戻せた背景には、家の備えだけではなく、見知らぬ

大勢の人々が形作る「助け合い」の仕組みがあったのだ。

二日間の意識不明という出来事は、僕に強い恐怖を与えた。しかし同時に、備えの大事さと支える社会の仕組みの温かさを教えてくれた貴重な経験となった。人生には、いつ、どのような危機が訪れるか分からない。だからこそ、日頃からリスクに備え、互いに支え合う精神が欠かせない。あのとき助けられた一人の人間として、僕は将来大人になったとき、今度は誰かの安心と未来を支える存在になりたい。保険がつなぐ助け合いの輪の一員となり、誰もが安心して夢に向かって歩んでいける温かい社会を未来へ引き継いでいきたい、と強く心にちかっている。